

彼らがステージから見る光景は素晴らしいものになるだろう SECRET 7 LINE



2010年1月、セルフタイトルとなる2ndアルバムをリリースし、同作レコ発ツアーや数多くの大型イベント出演、中国及び韓国ツアーなど、タフな現場で経験を積み重ねて來たSECRET 7 LINE。ひとつひとつのステージで身体と魂で感じた様々なものを糧にして、シーンを代表するライブバンドへと変貌を遂げた彼ら。待望の3rdアルバムは、そんな彼らが持つ天性のセンスを幾多の経験でコーティングした最強のライブチューン。2011年、彼らがステージから見る光景は素晴らしいものになるだろう。



INTERVIEW#1

「場数を踏んでいくことによって、自分の中での正解をいくつも見付けてきた1年だった」

●1stアルバム『How many lines does she hide?』(2008年10月)はそのときの等身大を詰め込んだアルバムで、ライブを重ねるに従って“もっともっとお客様と一緒に楽しみたい”という欲求が出て来て2ndアルバム『SECRET 7 LINE』(2010年1月)を作ったという経緯がありましたよね。その2ndアルバム『SECRET 7 LINE』のリリース及びツアーで始まった2010年はどうでしたか?

RYO：忙しかったですね。ライブは年間100本近くやったんですけど、自分たち自身1年前と比べ変わったという実感があった。

●どういうところが変わりました?

RYO：ライブに対して自分たちが求めるレベルがより高くなったと思いますし、ライブ自体の組み立てとかもししっかり考えるようになった。それは細かいところまでキチッと考えて作ってるという話じゃなくて、意識が高くなかったというか。

●2ndアルバム『SECRET 7 LINE』のツアー前半の横浜FADとファイナルの新宿LOFTを観たんですけど、1本のツアーの間でもかなりライブがしっかりとしたような印象があつて、更につい最近ライブを観たんですけど、1年前と比べてお客様の一体感が全然違うと感じたんです。技術的な成長もあると思いますけど、メンタル的な成長が大きいような気がするんです。

TAKESHI：やっぱりツアーが長かったということもあり、単純に場数を踏んだからということも大きかったような気がするんです。で、ツアーをやっていくにつれてお客様も前より増えていって。だからお客様との信頼関係というか、「ここでこうなる」みたいな呼吸感が出来たような気がしていて。お客様が求めているものが明確にわかってきたとい

うか。そういう経験が自信になって、先ほど言われた「メンタル的な成長」に繋がっていると思うんです。やっぱり経験が結構かいと俺は思いますね。

●なるほど。

RYO：あと俺は思うんですけど、やっぱり経験がデカいですね。

SHINJI：他の2人がどう思ってるかわからないんですけど、やっぱり経験やと思うんですよね。

●あっ、バカつた。

SHINJI：「これはお客様がついてきてくれる/これはついてくれない」っていうことがわかったというか。アクションももちろんそうですが、気持ちがついてくる/こないっていうところも含めて。それは本当にちょっとしたことで変わるという実感があって、表現の差だったり口調の差だったりとか。場数を踏んでいくことによって、自分の中での正解をいくつも見付けてきた1年だった。それが自信に繋がったんじゃないですかね。

RYO：別に頭で考えながら何かを演じるということではなくて、肌で感じたことを実践してきたというか、雰囲気を擅んではいったというか。

SHINJI：あと、対バンした他のバンドとか見てて刺激を受けたり勉強することも多かったんです。他のバンドをお客さんとして観ていて、気持ちを持つてかかる瞬間があった。「なぜ気持ちを持っていかれたんだろうか?」って考えて、自分たちの表現に繋げていたんです。

●そういうことを色々と考えたのは、“ライブでお客さんと一緒に盛り上がりたい”という想いが根底にあるからですよね。その気持ちが以前と比べてより強くなっているんでしょうね。

TAKESHI：うん。2ndアルバム『SECRET 7 LINE』は“ライブをお客さんと一緒に盛り上がりたい”とい

INTERVIEW#2

「確かにこの曲ができたときは手応えがあったんですけど、初めてライブで演ったときはちょっと自分でもびっくりしました」

●アルバム『APATHY』なんですが、いつ作ってたんですか?

RYO：6月のツアーファイナルが終わった瞬間からは次のアルバムの準備に入っていますね。曲を作りながらライブをやっていたというか。

●つい先日のFear, and Loathing in Las Vegas レコ発(12/9@新宿ACB)でもM-3. 「DANCE LIKE NO TOMORROW」を演ってたじゃないですか。初めて聴くであろうおばかりだったけど、めちゃくちゃ盛り上がりって掛け声まで起こって。この曲はアルバムの推し曲ですが、2010年に色んなところで培って来たことの解答が、この曲とあの日のお客様の反応にあったんじゃないかなという気がしたんです。この曲はツインギターの掛け合いも魅力だし、“ライブでお客さんと一緒に楽しめたい”という想いが形になっているし、ベースの良さもあるけど何より楽曲としてのインパクトがある。要するにSECRET 7 LINEというバンドの個性が際立っている曲だな。

RYO：確かにこの曲ができたときは手応えがあったんですけど、初めてライブで演ったときはちょっと自分でもびっくりしましたね。「あれ? お前ら

聴いたことないハズやんけ?」みたいな。2番からもうみんな歌ってたから。

●そうですよね。ライブでお客さんが入ってこれる余白…ピートやコーラス、掛け声みたいな…がある曲は今回多いと思うんです。前作からそういう匂いは出でて来ていますけど、今作でよりハッキリ出でますよね。

RYO：別に新しいことをしようというわけではなくて、前作からの流れで曲を作っていましたけど、“ライブでお客さんと一緒に楽しもう”っていう部分は更に意識しました。自分がお客さんとしてライブを観た場合、一緒に盛り上がることができるポイントがあるとやっぱり自分のテンションも上がるんですよ。そういうポイントを自分でも“作ろう”と思わなければ割とサラッとした曲になってしまいますよね。

●RYOくんもSHINJIくんもまず鼻歌で曲を作りますもんね。

SHINJI：うそなんですよ。

RYO：だから“無理矢理みんなをノらせよう”という感じではなくて、“お客様として盛り上がりたい”という意識で曲を作っているわ。

●なんかそれはわかります。無理矢理感がない。世の中には“ここで盛り上げる”ということが見える音楽もあってそれはそれで別に悪いことではないと思いますけど、今作はメロディや展開で聴く人の気持ちを温めてから盛り上がる、っていう感じ。SECRET 7 LINEは1stの頃からメロディに定評があるバンドだと僕は思っているんですが、そこにライブハウスでの経験が加わった産物だと思います。

RYO：ギターを持って家で曲を作っているときでも“これいいな”と思う曲ができるときは、立ってギターを弾きながらじゃないと気がすまないくらいのテンションにはなってますね。座ったままで終わる曲はアルバムの候補にもなってないというか。もちろん曲にもありますけど。

●「立って」というのは、ちんちんのことではないですよね?

RYO：どちらもです。立てるし、勃てる。

●ダブルミーニングか。

SHINJI：俺もライブを想像して作りますね。これをこうしたら…あ～…あ～…あ～…って。

●表情を見ているからわかりますけど、それを読

SECRET 7 LINE [L-R] G./Vo.RYO、Dr./Vo.TAKESHI、Ba./Vo.SHINJI



面にしたら意味わかんないんですけどね。

TAKESHI：確実にわかんない（笑）。

RYO：でも絶対に画面に載せますよね？

●いや、さすがにこのくだりは載せたらダメでしょ（笑）。

SHINJI：俺は曲が1回できたら、その曲をこねくりまわすんですよ。一首上げたり下げたりもして。頭の中でライブで演っている映像を浮かべつつ、最終的な判断をしていくっていうか。

●確かにメロディが流れすぎてても残らないですもんね。でも今作のメロディはいい意味での引っかかりがあるというか。それとM-7、「ONE MORE CHANCE」という曲がありますけど、この曲はすごくグッときたんですよ。英語詞なので具体的にどういうことを歌っているかは聴いたときにわからなかつたけど、何か真に迫るものがあった。すごくエモーショナルなんだよ。RYOくんとSHINJIくんは以前 SPICY SOCKS というバンドをやっていて、解散後に上京して SECRET 7 LINE を組成した…という経緯がありますけど、そういうバンドの背景というか根底の想いを感じたような気がして。

SHINJI：いや、別にそういう歌ではないです。

●あ、関係ないのか。

SHINJI：でも自分には音楽があるんだなっていう曲なんです。俺は30歳になるんですけど、年を取ることが自分にはすごく大きくて。

●そういうことをもっと教えてくれよ！ ブルースを感じさせてくれよ！

RYO：ハハハ（笑）。

SHINJI：限界じゃないんですけど、たまに“いつまでできるんやろ？”って考えたりするんですよ。でも音楽はやり続けたいと思う。そういう歌ですね。これだけは放したくない。“ONE MORE CHANCE”というタイトルにしたのは、今までのバンド人生に於いて何回も挫折を経験していく。でもやっぱりアカンとなったときでも諦めるんじゃないなくて、もう1回チャンスを拾いに行こうっていう。

●SPICY SOCKS 関係あるやん…個人的にそういう曲ってすごくグッとくるんです。“みんなで楽しもうぜ”っていう曲もいいけど、それよりも“俺は本気でこう思ってるねん”っていう曲に心が動かされる。

SHINJI：ああ～、俺もそっちです。

●この曲は歌い方もちょっと違うというか、歌の芯にある気持ちの強さが伝わってきたんですね。

SHINJI：ああ～、自分にとってすごく大切なことを歌ってるからそう見えるんですねかね？

●そうだ思いますよ。というか SHINJIくんは

そういうところありますよね。「1993」(1stシングル「1993」/2ndアルバム「SECRET 7 LINE」収録)もそうで、インタビューではあまり自分から言わないけど、色々と訊いたら曲に込めた熱い気持ちをボロッと教えてくれる。

SHINJI：そういう傾向がありますね（笑）。俺は自分の正直なところしか書けないんですよ。考えてないことを書けないというか、自分の芯から出るものしか歌詞になれない。良くも悪くも性格上そういうところがあるというか。例えば思ってないことを書いたとしたら、自分の中で「いやいやいやいや！」ってなるんですよ。表現の仕方はいっぱいあるし言葉遊びも変わったりしますけど、芯から出るものしか出せないんですね。…なんか真面目すぎる話ですね。

●いや、全然いいと思いますよ。というかこれインタビューですから真面目な話をしてください。

一同：（笑）。

●M-B.「DREAMS COME TRUE」からもそういうのを感じたんですね。“気持ち”を感じた。SHINJI：「DREAMS COME TRUE」はいちばん最後に作ったんですよ。曲をバーッと並べたとき、なんか足りないなと思って。初期衝動っていうか勢いつきが、で、そういう曲をこう。

●それは感じました。曲調も含めて、“強さ”とか“意志”を感じた感じ。“感じた感じ”ってなんか日本語おかしいけど。

RYO：雑誌の人ですよね？

●はい。いちおう。

SHINJI：「DREAMS COME TRUE」もそうですけど、今回の歌詞は今まであまり触れなかったところに触れた感じがありますね。例えばM-6、「UNITE」という曲があって、「ずっと笑っていよう」ということを歌ってるんですけど、昔から仲良くさせてもらってきて、で、俺が上京する前とかEASY GRIPの曲にすごく勇気付けられたことがあったんです。実は“もうバンド辞めようかな”と思ったときがあって、そのときに勇気付けられたんです。

●ふむふむ。

SHINJI：俺、ギターオークールのSUNNとすごく仲がいいんですよ。あいつらが最初に日本に来たときに対バンしてからの付き合いで。で、2010年に韓国ツアーに行ったとき、SUNNがふと「俺ら一生友達や」と言ってくれたんですよ。「お前は俺にとって日本人の知り合いの中でスペシャルな友達や」と。

●なるほど。

SHINJI：あと、やっぱりライブではお客さんと心が近くなる感覚がある。そういうときは“終わらない”っていう気持ちがすごく強くなる。内容というか対象はバラけちゃってますけど、そう

日本人って「一生友達や」とか言わないじゃないですか。どんなに仲のいい友達でも。

●言わないですね。

SHINJI：でしょ？ でもなんか、國も違うし一緒にいる時間が長いわけでもないのにそういう関係が作れるんやなって。例えば今は日本と中国とか、國同士でもすごくいいみ合うこととか多いじゃないですか。でもみんなが「一生友達」っていう気持ちを素直に出せたらなって。思っててでもかなかと言えないことやけど、そういうことをもっと言えるようになりたいし、みんなも言えるようにならいいなって。

●するに、今まで思っていたけど出していかなかつた気持ちを出したということですよね。「眞面目か！」とか「お前サムい！」とか言われるかもしれないけど（笑）、そう思ってるんだから素直にしていくよ。

SHINJI：そうですね。そういう部分は別に隠さなくていいかなって思うようになりました。

●めちゃめちゃいい話ですね。あとM-11。「SEE YOU AGAIN」という曲がありますが、これ何なんですか？ めちゃめちゃボップだし、「幸せなら手をたたこう」のメロディをマッシュアップしてる。ボップに振り切れてる。

TAKEKI：そんなに振り切れボップなんだ（笑）。

●いい意味でそう感じましたよ。

SHINJI：「幸せなら手をたたこう」はまさにそうで、あれはスペインの民謡が原曲だから著作権は大丈夫なんですよ。そもそもああいう歌って身体に染み付いてるものだから自然に出て来るし、入り易いかなって。

●かなり新鮮でした。

SHINJI：この曲も歌詞が自分の中では大切で。ツアーやまとわってるとき、一緒にまわってる他のバンドとかと心がすごく近くなる感覚があるんですよ。普通に遊んでる友達とかよりも。だからツアーガ終わるときにすごく寂しくなる。

TAKEKI：3日一緒にいた最終日とかね。わかる。SHINJI：ううそう。それが1週間だったらもっと寂しい。

●それは、例え他のバンドだったとしても強い想いを持っている者同士が同じ方向を向いているからなんでしょうね？

SHINJI：ううなんですよ。俺はたまたまバンドやってるからツアーのときにそう感じるけど、人それぞれそういうときってあると思うんですよね。“もっとこの時間が続ければいいのに”っていう。

●ううん。僕もこのインタビューがもっと続けばいいのになって思ってる。

SHINJI：（無視して）あと、俺は先輩のEASY GRIPっていうバンドが大好きなんですよ。ちょっと前に活動休止しゃったんですけど、昔から仲良くさせてもらってきて、で、俺が上京する前とかEASY GRIPの曲にすごく勇気付けられたことがあったんです。実は“もうバンド辞めようかな”と思ったときがあって、そのときに勇気付けられたんです。

●そうだったんですね。

SHINJI：そういうのもあって、EASY GRIPが活動休止になったのはすごく寂しかったんですよ。でも解散じゃなくて活動休止やから“早くまた会いたいな”と思う気持ちがあって。

●なるほど。

SHINJI：あと、やっぱりライブではお客さんと心が近くなる感覚がある。そういうときは“終わらない”っていう気持ちがすごく強くなる。内容というか対象はバラけちゃってますけど、そう

いう色んな気持ちを「SEE YOU AGAIN」に込めました。

●SECRET 7 LINE の今までの活動を感じたひとつひとつの気持ちが今作に込められているんですね。あとM-12、「GRATITUDE」は名曲ですよね。ストリングスなんかも入れてたりして。

SHINJI：RYOくんが最初に作ってきた歌を聞いたときから“あ、いいな”っていう直感がありました。

●なぜその2曲が好きなんでしょう？

TAKEKI：わかんない。

●わかんないのか… 今回ドラムはどうでした？

TAKEKI：アレンジは苦労したという感じではないんですけど、最近は外人のバンドと一緒にやる機会が増えて。観ていると、外人のドラマ一いつおかずの無駄入れをしないんですよ。それがすごくかっこいい。

●あっ、その曲をパラった？

RYO：オマージュです（笑）。メロディとか全然違うんですけど、アコギで始まる感じとか雰囲気とか。

というは、別に著作権に引っかかるようなこと

はしていないけど、敢えて意識したかったんです。この曲を聴いて「GREEN DAY のあの曲っぽい雰囲気だよね」と言わること自体が気持ちいい。むしろ言って欲しいくらいの気持ちで作ったんです。

●なるほど。ちなみに前回のインタビューもそうでしたけど、曲のことを訊き始めると作曲していない TAKEKIくんの発言がガクンと少くなりますが。さっきから携帯いじったり JUNGLE★LIFE 論ひだりしてますけど、大丈夫ですか？

TAKEKI：（携帯と JUNGLE★LIFE とコンビニ

で買って来たホットケーキを置いて）全然大丈夫です！ 超楽しいです！

●どの曲がいちばん好きですか？

TAKEKI：俺は「ONE MORE CHANCE」がいちばん好きですね。あとは「DANCE LIKE NO TOMORROW」。

●なぜその2曲が好きなんでしょう？

TAKEKI：わかんない。

●わかんないのか… 今回ドラムはどうでした？

TAKEKI：アレンジは苦労したという感じではないんですけど、最近は外人のバンドと一緒にやる機会が増えて。観ていると、外人のドラマ一いつおかずの無駄入れをしないんですよ。それがすごくかっこいい。

●おかずの無駄入れ？

TAKEKI：サックリとしているというか、シンプルなことやってるだけで味が出るというか。選びどころが上手いのかな。

RYO：手数で勝負しているわけではない、っていうことやんね。

TAKEKI：ううそう。手数で、っていう感じじゃないんですよ、外人のヤツらは。

●はい。

TAKEKI：だから今回、手数が必要なところ以外はそんなに音を入れないようにしたんです。シンプルなドラムパターンで味を出すことをがんばったというか…あわかった！ 自分自身そういう手応えをいちばん感じるのが「ONE MORE

CHANCE」と「DANCE LIKE NO TOMORROW」なんだ。…だからこの2曲が好きなのか！ SHINJI：結局ドラム基準か（笑）。

●アハハハ（笑）。でも3枚目らしい、いいアルバムになりましたね。

RYO：ホンマですか？

●うん。1stからの足跡がキチンと見えるし、SECRET 7 LINE の個性を感じることができるし、もちろんライブが楽しみになる。そういうアルバムだと思いますよ。

RYO：2ndがセルフタイトルだったじゃないですか。今回はその次に出すアルバムということで、自分の中のハードルが高かった。セルフタイトルの次だから、自分の中でかなりの手応えがないと出せない、っていう気持ちがあったんですね。

●ああ、なるほど。

RYO：で、自分たちの中では曲作りもレコーディングも“やりきった”と思って形にならんんですけど、最終的に判断するのは聞く側じゃないですか。そこで“やっぱり2ndでしょ”とか思う人もいたらしく…もちろんそういう人はいるでしょうけど…やっぱり“3枚目がいい”と思われたら嬉しいいい、そういうアーティストなって思ってたんです。

●要するにフレッシャーが高かった。

RYO：ううですね。だから聴いてくれた人の反応が今まで以上に楽しめんんですよ。どうでしたか？

●いや、さっきいましたよ。

RYO：ううですね。だから2ndのときも武器が増えたんですけど、武器の中でのチョイスがなかったというか。

TAKEKI：ううだね。

●武器のチョイスが増えた？

RYO：今まででは攻撃力90の剣しか持ってなかつたんですよ。でも攻撃力90の剣と攻撃力90の斧の両方を使えるんです。

●同じこと言ってるだけですかね。

SHINJI：要するに色々なセッティングが組めるっていうのが楽しめですね。それが楽しめやし、このツアードで更に1ステップ先に進めると思います。

●ということは、1/23から6/11のファイナルまで50本近い今回のツアーは、全箇所違うセッティングで演るんですね？

TAKEKI：ううですね。iPodのシャッフル機能で毎回その日のセットリストを決めようと思ってます。（※編集部註：嘘です）

RYO：それにワンマンは今回初めてなんですね。

●ワンマンだからMCもいっぱいしなくちゃいけないですね。

TAKEKI：MCのときだけステージに上がって来てもらいたいですか？

●イヤです。

SHINJI：まあ飾らずにっていうか、普段通りに気楽にしゃべるうかなどと思ってます。

RYO：ワンマンくらいはグダグダでもいいよな？

SHINJI：うん、そのときに気になってこととかしゃべったり。

●6月だから「そろそろ梅雨ですね」みたいな。

RYO：ううそう。どうせ俺のことやからワンマン当日は雨降るんですよ。

TAKEKI：じゃあMCは「本日は足下の悪い中…」とか言っとけばいいな。

interview : Takeshi,Yamanaka

INTERVIEW#3

「少しだけ問題提起がしたかった。“そういう意味があったのか”って思ってくれて、少しでも何かがよくなればいいなって」

●ところでアルバムタイトル“APATHY”は“無感動”とか“無関心”という意味ですが、なぜこのようなタイトルにしたんですか？ アパホテルから取ったんですか？

TAKEKI：アパホテルの女社長大好きなんですねけど違います。

●あ、やっぱり違うのか。

TAKEKI：タイトルを決める前にジャケットデザインを決めたんですけど、ジャケットは“無感動”っていうテーマでデザイナーに依頼したんです。俺はアルバムタイトルとジャケットがリンクしている作品とかが好きなんですよ。で、なんとか自分たちが感じたり考えたりしていることを1つのパッケージとして発信したかったからなんです。

●ああ～。

TAKEKI：パッと見ではわからないけど、タイトルもジャケットもひとつ表現として考えたというか。俺、昔からジャケットとか隅々まで見てたんですよ。洋楽のCDとか買ったらライナーノーツ全部読んで。高校のとき、BAD RELIGIONのライナーノーツに「パンクロックはカラオケなんかじゃないから感じて考え方」って書いてあったんですね。で、2日後に新聞を見たらそのことはもうすごく小さくしか掲載されてなくて。そのときに“なんてみんな無関心なんだうう”って本気で思つたんですよ。だから今回のジャケットは“無関心”にしよう。

●なるほど。違法コピーとかしてる人にはわからない、CDならではのおもしろさですね。

TAKEKI：ううなんですよ。そういうメッセージも込めてます。

●1/23から“APATHY TOUR 2011”が始まりますね。ファイナルは6/11の代官山UNITワンマン。

TAKEKI：ツアーは楽しみですね。アルバムを3枚